



6月

上村豊



児玉美咲の「here/there farther landscape」系満市の平和祈念公園

戦後70年を機に「平和と」として、会期を「慰霊鎮魂」をテーマに掲げ、この「月」である6月に、会場さまざまな世代の美術作家を系満市摩文仁を中心に志により立ち上げられた地域に特化させ、その趣旨をより鮮明に打ち出した「マブニ・ピースプロジェクト」(6月4~30日、平きた)。東アジアの平和を巡る情勢が激しく動き変化する中で、沖縄戦を象徴する目を開きを迎えた。今回はこの活動を中心に取り上げ、今後ますます深まるべき試みを継続して発信していくことの社会的な意義は、今後ますます深まるはずである。

「時と場所」に正面から向き合う試みを継続して発信していくことの社会的な意義は、今後ますます深まるはずである。

同展は当初、約半年間にわたって県内各地の会場で開催された複合企画「すてぃー」Regeneration「何のために？」「何の目的？」「何処から何処へ？」のサブ・プロジェクトとして始まり、第2回展からは独立したプロジェクトとして創られてきた。自身

平良亜弥による「つながれぬこいのち」系満市安里のひめゆりピースホール



林怡君「Walking Stars」系満市米須のキャンプタルガニー

表現活動の根本に関わる問いに立ち返る経験となつて、中堅や若い世代の作家たちにとっては、通常の「自己表現」の手前、他者の記憶「土地の記憶」との壁に相対することにな

る。それをこのように同化あるいは異質化、自分の「いまここ」に表現し返すことのできるのか。そのような表現に表れる「主体性

絶対的な距離を何とか自らの中に「含み込む」「噛みしめる」試み。

今年新たに行われた、韓国・済州島で「4・3事件」をテーマにした表現活動を続ける作家・関係者との交流の中で、地理的・歴史的に共通点の多い二つの場所においてアートに切実に求められているもの、抑圧された記憶の「発掘」と同時に「愛容と供給」を巡るオルタナティブでユニークなアイデアを提示している。紙面の関係で、今回詳しく紹介できないのが残念だが、今後の展開に注目したい。



比嘉座による芝居系満市のキャンプタルガニー

「琉球弧を記録する会」の映像上映と、ウチナーグチ演劇集団「比嘉座」の芝居による「しまくとぅばで語る戦世」。キャンプタルガニーの庭で行われた夜公演では、月の光、肌を感じる空気、風の音や虫の音、その場を構成する全ての要素と一体となり、「過去」「いま」「ここ」を、話者・演者達と観客を繋ぐ、人稱を超えた「語り」が私たちを包み込んだ。

向き合う痛み、悲しみ

マブニ・ピースプロジェクト

沖縄戦の記憶を表現

変化」にこそ、このプロジェクトの大きな見どころがある。筆者が感じてきた。他者の経験との間にあ

な指針となるであろう。6月、県内ではこの他に沖縄という「場所」にどのようなコンテンツが表現の「場」を立ち上げていけるのか、その可能性を考えると興味深い試みがいくつかが行われた。「BARRAKアンデパンダン」(6月15~24日、那覇市大道BARRAK)、山城あかね・亀島英莉による「展」(4:00~9:00)の「浮遊」(6月6~12日、art gallery PIN-UP、宜野湾市真栄原)など。

いるのではないだろうか。そのことは、地域振興を目的に公的資金を導入して行われる所謂「地域アート」とは一線を画し、専門のデザイナーやキュレーターといった立場を介さず、あくまでも作家による主体的参加・ボランティア・協働をベースにした企画・運営を模索してきたことにも表れている。



平岡昌也作品系満市の平和祈念公園、ピクニック林間広場



琉球弧を記録する会上映会系満市のキャンプタルガニー



秋山佑太「here today, gone tomorrow」(「BARRAKアンデパンダン」〜生き抜くために、作るのだ。より)